

出雲地区

保護司会だより

第26号

松江刑務所における就労支援について

松江刑務所 所長

小沼孝行
おぬま たか ゆき

平成二十四年の犯罪対策閣僚会議において「再犯防止に向けた総合対策」が決定され、社会生活上困難な事情を抱える刑務所出所者の「居場所」と「出番」を確保するために就労支援や福祉的支援が積極的に行われるようになりました。当所においても、平成二十年から非常勤ながら就労支援スタッフを配置して就労支援を充実してまいりました。支援の内容としては、全受刑者に対する指導、個別面接による指導、職業訓練受講者に対する指導等があります。

全受刑者に対する指導としては、毎月一回、就労支援スタッフから、社会復帰後に就労した職場で円滑な人間関係を保ち、仕事を長続きさせることを目的とした作業教育を訓話形式で実施しています。

個別面接による指導としては、釈

放の見込日から概ね三か月以内の者、又は、仮釈放の申請が決定した者のうち希望者に対して、就労支援スタッフが個別に面接を実施することで、過去の就労状況等を振り返る自己分析や出所後の仕事に必要な項目について確認しながら指導を行い、ハローワークと連携して出所後の職業を明確にし、速やかな求職活動ができるよう支援を行っています。

就労に必要な基礎的知識及び技能等を習得させることを目的として、ビジネススキル科、フオークリフト運転科及びビル設備管理科の職業訓練を実施しています。その受講者に対する指導として、出所後に就労を予定している者を対象に自己の問題点を認識させ、社会復帰後の求職活動を見据えて履歴書の作成指導等を行い、職業人としてのマナー、職場での円滑なコミュニケーションの方法について、SST（社会適応訓練）を通じて習得させる機会を付与しています。

また、ハローワークとの連携として、一昨年度までは、月二回ハロー

ワークの職業相談を行っていました。が、昨年度に当所が就労支援の強化モデル矯正施設に選定されたことから、ハローワーク職員が週二日、当所に駐在し、職業講話を含めた就労支援をより手厚く行えるようになりました。その結果、昨年度は一名、本年度は既に二名の者が在所中の就職が内定いたしました。

この他にも、「外出」制度の実践として、仮釈放を控えた者の中から、特に選ばれた者を職員の付添なしにハローワークを訪ねさせ、実際に自分自身で求人案内情報を検索するなど、出所後の求職活動がスムーズに行えるような配慮もしており、昨年度に一名、本年度も一名実施しております。

以上のような当所の就労支援が、「再犯防止に向けた総合対策」に掲げられた「世界一安全な国、日本」復活のため、再犯の防止と新たな犯罪被害者を生じさせないという社会の構造を構築する一助となればと願っております。



人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク60周年

平成28年度 「社会を明るくする運動」

標語及び作文入選作品の紹介

出雲地区保護司会では「犯罪のない明るい街づくり」「青少年の非行防止」をアピールする標語を、一般の部、小・中学生の部（出雲市青少年育成市民会議との共催）として募集しました。一般は94点、小学生は950点、中学生は178点の応募がありました。

また、島根県社会を明るくする運動推進委員会が行った作文コンテストに協力し、小・中学校に参加を呼びかけたところ、小学生から63点、中学生から46点の応募がありました。

当保護司会で慎重に審査した結果、次のとおり決定しました。たくさんの応募をありがとうございました。

一般の部

最優秀賞

立ち直る

君の決意に 地域の支援

芦渡町 石橋 厚

優秀賞

大丈夫

地域みんなが 見守り隊

天神町 周藤 千雪

笑い声

絶えない家庭で

育くむ未来

大社町 田中由紀子

差しのべる

愛の手、守る手、励ます手

大社町 伊野木 正

見てほしい

スマホじゃなくて

こどもの笑顔

斐川町 大森 淳平

広げよう、

住み良い町と、地域の絆

平田町 磯崎 又司

佳作

一寸待て!!

上手い話は、落とし穴

大津町 児玉 節子

近所付き合いは、

もうひとつの防犯ブザー

古志町 藤田 保

『ありがとう』

感謝を笑顔で 伝えよう

大社町 田中 秀昭

あいさつが

出来る町には 非行なし

朝山町 成相 富枝

「ありがとう」

そのひとことで 和む家

武志町 出川 武範

ホットする

家族で囲む楽しい食卓

斐川町 大森 咲希

あなたは誰かを支えている

誰かがあなたを守っている

斐川町 勝部 哲

今日を一生懸命に生きる

これ更生の証しなり

大社町 樋野 誠

あいさつは

子供と大人 つなぐ声

大社町 佐々井康光

知らぬ間に

言葉が凶器に かわってる

唐川町 荒木喜代子

小学生の部

最優秀賞

いじわるを やめないひとは
よむむしさん

東小学校 一年 松井 宗孝

優秀賞

やめようよ

見てみぬふりや 人任せ

大津小学校 六年 向山 海里

こんにちは

えがおとえがおが

であうまち

高松小学校 三年 石橋英太郎

佳作

かおをみて あいさつしよう

じぶんから

長浜小学校 一年 今岡 奏人

そのことば

いわれていやなら

いわないで

北陽小学校 一年 福島 心優

「どうしたの？」

きづいてくれて

ありがとう

北陽小学校 一年 矢田 友希

いっしょだよ

ぼくもわたしも

いのちのおもさ

北陽小学校 二年 廣江 亮輔

こまったら

みんなにそうだん

たすけあい

北陽小学校 二年 佐々木 翔

ふだんから

ポイ捨てしない 心がけ

北陽小学校 五年 藤原 成

いちばんの

げんきなあいさつ

じぶんから

灘分小学校 二年 來間 由衣

広げたい

小さな勇気と 大きな心

東小学校 四年 曾田 凌玖

気づく事

いじめをなくす 第一歩

東小学校 六年 高橋真里奈

笑わない

だれでもあるよ 失敗は

窪田小学校 五年 打田 真大

中学生の部

最優秀賞

悪口、かげ口、やめようよ
言葉のナイフは

見えない凶器

南中学校 一年 高野 朋華

優秀賞

おかえりと

地域の身守り

夜道を照らす

南中学校 二年 奥井 寛太

おかげさま

感謝の心 忘れずに

浜山中学校 三年 川上 寛葉

佳作

ひろげよう

笑顔とあいさつ 地域の輪

第一中学校 一年 曾田 英男

その差別 なくしていくのは

あなたです

第一中学校 三年 和田 萌々

やりとりは、

メールを使わずむき合って

南中学校 一年 高橋 琉聖

「おはよう」で

笑顔あふれる 一日に

南中学校 二年 白根 安珠

伝えよう いくつになっても

ありがとう

浜山中学校 一年 福岡 陽太

育てよう

未来へつながら 地域の絆

浜山中学校 一年 河井 菜月

意識して

家族の時間 増やそうよ

浜山中学校 三年 藤井 彩香

その言葉

発信したら もう消せない

浜山中学校 三年 森山 愛月

「ありがとう」

メールで言うより

直接言おう

斐川東中学校 二年 尾原 悠沙

言われても 言っても嬉しい

ありがとう

斐川西中学校 一年 加本 優奈

「社会を
明るく
する運動」

作文コンテスト優秀作品

小学生の部 島根県BBS連盟会長賞

「みんなが幸せになるために」

出雲市立塩冶小学校 五年

宮内 楓生



七月二十六日に、神奈川県にある障害者福祉施設で、おおよそ二十歳のぼくは、このニュースを見てとてもこわいと思いました。ぼくにはチックがあります。大きい声が出てしまったり、全身がはげしく動いたりする事が何年も続く重症のチックです。言いたくない言葉が出たり、顔や手や足も勝手に動いてしまいます。それはしゃっくりと同じように、止めたくても止められません。成長するとチックはなくなっていくそうですが、十才

から十五才くらいまでが一番チックがはげしく出る年れいなので、十才のぼくは、今、とても大変です。

そんなぼくを見て「大丈夫？」と聞いてくれたり、「気にしなくていいよ。」と優しく声をかけてくれる友達がいます。その人達は、人の気持ちが考えられる優しい人達だと思います。

そこでこう考えました。世界中の人達一人一人が、人の気持ちを考えることができたなら、犯罪は起きなくなるんじゃないかと思います。きっと、障害者福祉施設をおそった犯人は、人の気持ちを考えることができずに、自分のことしか考えられない人

なんだなと思います。

人はみんなだれでも、大切な人がいたり、大切に思ってくれている人がいると思います。自分の大切な人を思い浮かべて、優しくする気持ちが大切です。

ぼくには大変な病気があるのと同じように大変な思いをしている人の気持ちが、理解できると思います。でも健康な人は、病気の人の気持ちが分からないかもしれない。どうしたら自分とちがう人の気持ちがわかるようになるのでしょうか？

そこで、ぼくはまた考えました。考えているうちに、いろんな想像をしていることに気が付きました。人の気持ちを考えるためには想像力が必要だと思います。人の立場になって、一生けん命にその人や周りの人の気持ちを想像することが大事です。

例えば、ぼくが友達やその友達の家族の気持ちをきちんと想像できれば、その友達に意地悪なんてできないと思います。一生けん命想像することで、意地悪されてつらい気持ちや、家族

が悲しくなる気持ちがわかったからです。

人をきずついたり、人の物をぬすんだりする前に、きずつけられる人、物をぬすまれた人の気持ちを上手に想像できたら、きずついたり、ぬすんだりできなくなると思います。

人の気持ちを想像できれば、安全運転したり、困っている人を助けたりできると思います。そうすることで犯罪や非行のない社会を作れるんじゃないかと思います。ぼくも、もっとたくさん人の気持ちを想像して、たくさんの人に優しい気持ちを持てるようにします。



中学生の部 島根県保護司会連合会長賞

相手と分かり合うために

出雲市立第一中学校 一年 三

み

成

愛

実



「いじめる人は、なぜいじめるのだろう」自分の弱さを隠すため、優越感を得るため、いろいろとその理由は考えられますが、いじめる人が全て、相手を傷つけたと思っている訳ではないと思います。これは私が経験から出した答えです。

私は小学校五年生の時、いじめを受けました。中心になっていたのは、とても仲がよかった友達で、一年生の頃から、いつも一緒にいました。

私は三年生まで、児童クラブに入っていました。ある時、そこに新しく女子が入ってきました。同学年ということもあり、体育館で遊ぶ時はその友達と遊んでいました。しかし、それまでずっと一緒にいた友達が、「どうしてその子とばかり遊ぶの。」と怒ってきたのです。けんかになり、結局新しく入ってきた友達はその後児童クラブをやめ、そのことがきっかけかどうかはわかりませんが、転校していきました。互いに気が強かったからか、その

後も仲のよかったその友達とはけんかが多くなりました。そして、もう一人の別の友達と一緒に、私の悪口を言うようになりました。「近づいたら、ばいきんがうつる。」

私は悲しかったけれど、弱さを見せたら「負ける」と思い、自分に「そんなことはない」と言い聞かせ、その友達の前では強く言い返していました。

体育があったある日、更衣室で散々言われて、泣いてしまいました。着替えが終わわり、校庭に出るためにクラスのみんなが昇降口に向かったあと、クラスの違う数人の女子が、「大丈夫?」と声をかけてくれました。

とてもうれしかった反面、自分が心配される側になったということに初めて気がきました。ニュースなどでいじめについて目にしても、「私には関係ない」と思って気にも留めませんでした。

しかし、対象となった今、自分で

はまだ耐えられると思っていても、周りから見ると大丈夫とはいえない状態だったのでしょう。今思うと、「自分はまた大丈夫」と思い込もうとしていたのかもしれない。そんな体験をしました。が、小学校六年生になると、友達ができました。絵を描くことやアニメやマンガが好きという共通の趣味を持った友達です。中学校に入ると、別の小学校から入学してきた人ともたくさん話せるようになりました。

私は小学校の頃から人の多いところや、初対面の人がいるところが苦手です。一人で本を読むことが好きで、人見知りなこともあって、周りに誰もいなくても平気でした。でも、小学生の時に一人でいた私を気にかけてくれた友達がいてくれたことで、「人という楽しさ」を教えてもらいました。

いじめと思われる行為の中には、相手を傷つけたくするものばかりではないと感じています。私は、結果的にはいじめを受けました。でも、あの友達は、私と遊びたかっただけなのではないかと思うのです。そういう思いがうまく伝えられず、気持ちが悪く違つことでもいじめにつながります。

私自身、まだ人身知りの部分があ

り、思ったことを相手にうまく伝えられないことがあります。でもこの体験を通して、やはり、相手としっかり話をするのがとても大切なのだと改めて思います。ラインやメールなどを通してではなく、相手と顔を合わせてコミュニケーションをしっかりとることが必要だと思います。

もう一つ大事なことは、人がやるからやるとか、人に言われて流されるとかいうのではなく、何を言われてもされても、流されないよい気持ちを持つことです。

私は、少しずつ、相手との会話を増やすように心がけています。それは、相手の気持ちを知らなくてもあり、自分の気持ちを知ってもらうことでもあります。まだ変わり切れていないところも多いのですが、私は、体験を通して気づいたことを忘れずに、これからも生活していきたいと思っています。

●その他の入賞者

島根県BBS連盟会長賞

大好きな家族

出雲市立浜山中学校 三年

森山愛月



退任に当たって 思うこと

平田支部 森山 正洲

教職を退職して間もなく保護司の委嘱を受け、以前に父親も関わっていたこともあり、何の予備知識もないまま引き受けました。

最初の新任研修で保護司の使命や役割、保護司として必要な基礎知識・心構え等について研修し、その任務の大変さを知りました。

主に犯罪や非行に走った人の立ち直りを支え、再犯を防ぐ活動ですが、これは保護司一人の力ではどうすることもできず、本人はもとより家族、あらゆる機関や地域の方々の理解と支えがなければできないことではありません。

就任から十六年間、何人かの保護観察や環境調整を手掛けながら思うこと、又、研修や情報交換等を通して更生保護の現状と実態から気付いたことは、とにかく「青少年を安易に非行や犯罪に走らせてはならない」ということです。

軽い気持ちで非行や犯罪に走った人が、刑罰を受けて少年院や刑務所のお世話になり、退院・退所して社会に復帰することがどれほど大変か思い出されました。

最初の頃は、保護観察対象者の面接や支援に心を致し、何とかして社会復帰をさせたいと願いながら努力していましたが、努力虚しく、次の面接に訪れることもなく、数日後に再び万引きや窃盗で捕まり、再び少年院や刑務所に帰る対象者に出会いました。私の保護司としての対応が至らなかつたがために、と自分を責めました。

やがて罪を犯した対象者が社会復帰するための生活環境調整に携わり、再び非行や犯罪を犯さないよう、より良い社会復帰の環境を整えようと、所内にいる対象者と手紙で心を通わせたり、時には少年院や刑務所を訪問して対象者と面接し、今

度こそと励ましたりもしました。

或る時、出所間近を悟った対象者から一通の手紙が届き、その中に「やがて刑期が終わり塀の外に出なければならぬが、そのことを考えると今から怯えて夜も眠れない。今度出所する時は、今まで交流のあった友達や地域の人との関りのない処に行きたい」とありました。この一文は、出所を待っていた私の心に深く響きました。

面会に少年院を訪れた時のあの重く重い空気。法務教官が面会室に案内するため、通路の扉を開閉する鍵束のチャリンチャリンと響く音が今でも忘れられません。

その時、つくづく「罪を犯させてはいけない。罪を犯してからでは遅い」と思いました。

それからは、保護司に対する考え方が変わりました。誤って非行や罪を犯した人たちの立ち直りを助け社会復帰を促すことはもちろん大切な役割ですが、それよりも、非行や犯罪に走らない環境づくりにもっと力を入れなければならないと思いました。

昔は、家庭の中に犯罪予防教育の場がありました。両親はもとより、

おじいさんやおばあさんが子供の頃、悪いことをすると「閻魔様が舌を抜く」とか、「壁に耳あり、障子に目あり」などと言って、「人が見えていないと思っても、障子の穴から覗かれているかもしれないぞ、人の悪口やよからぬ計画を立てていても、隣の部屋の壁に耳を当てて誰かが聴いているかもしれないぞ」とか生活の中でそれとなく教えられたものでした。

しかし、今はこのような場がほとんどありません。子供たちはゲーム感覚で、悪喝や万引きをする者も少なくありません。善悪の判断も真剣に学ぶ場がありません。案外でしたことが非行や犯罪に結び付くこともあります。

かけがえのない子供達・青少年を非行や犯罪から守るためにも、先ずは家庭で、そして学校・地域の中で犯罪予防に取り組んで行かねばと思っています。



第66回社会を明るくする運動 メッセージ伝達式・啓発講演会

「出会いふれあい結びあい」―温かく心豊かなまちづくりを願って―

講演を聞いて思うこと

保護司 中尾 亮 (犯罪予防部会)

平成二十八年七月一日、ビッグハート出雲において、松江市在住の吉長義親さんを講師に迎えて「出会い、ふれあい、結び合い」温かく心豊かなまちづくりを願って」と題する社会を明るくする運動の啓発講演会が開催されました。

初めに、吉長義親さんが理事長を務めておられる島根更生保護施設「しらふじ」についてのお話がありました。「しらふじ」という施設名には、罪を犯したわが子への母親の願いが真つ白の藤の木に込められています。

この施設は、少年院や刑務所を出たものの帰る家がない、身寄りが引き取ってくれない、そういった人を一時的に入所させる施設で、最長で六か月まで利用できるものの、大抵の方は三〜四か月で就職先や住む家が見つかって退所されるそうです。

入所者の生育歴を調べてみると、幼少期に家庭や家族の縁が薄い過去があったり、多感な時期にいじめや差別があったりして、ついには罪を犯

してしまうようになってしまったケースが多く、今度、施設を出ていくときには胸を張って社会に出ていくて欲しいと願い、そのために一人ひとりの関わり方を考えてプログラミングしているということでした。

また、入所者はこれまで一般社会から隔離されていたため、町の中にある「しらふじ」に入ると心の安堵感を持つことで、ほっとする」と感想を述べられるそうです。

次に、少年の事例を中心に非行や犯罪に至る心情・背景について話されました。

万引きしようとしたが母の顔が浮かび思いとどまったこと、集団で万引きしても両親は振り向いてくれないこと等々そのほかたくさんの方の事例を紹介されました。どんな子どもも自分が認められたり、褒められたりすれば変わっていくというお話でした。子どもの出すサインを親が気付いてさえいればまた別の成長の道もあったのかなと考えさせられました。



講演中の吉長義親さん

た。

そして、子どもの叫びを大人は理解できののかと問いかけられました。

子どもたち

はいろいろな場面で大人や友達に訴えかけているとして、子どもたちの叫びを三つにまとめられました。

一、子どもたちが夢を持っていないと言っています。それは大人が夢を持っているからで、大人が、子どもたちが若者が何を考え、何を感じ、何を求めているか分からないからではないかと我々に聞いたされました。お互いが助け合って、大きな夢を持つようにしていくということかなと思います。

二、子どもたちは自己肯定感が乏しく、自分は大切にされていない、必要な人間じゃないと言っています。それは、子どもたちのいいところや特性を大人が見つけられないで、悪いところをいっぱい見つけて指摘する。それを言われた子どもは自己嫌悪に陥って、他者を否定し、最後は自分も否定します。大事なことは、子どもたちの言っていることを、受け入れるということだと思います。

三、子どもは居場所がない、自分

はどうでもいい人間だと言っています。なぜかというところ、大人がきちんといいところを見つけて評価してくれない。よそのおじさんでもいい、おばさんでもいい、子ども、若者あるいは仲間のいいところを見つけてあげる、そのことが評価になります。そういう感性を持った人間になっていくということが大事です。

子どもの居場所ってどんなところでしょう。自分がそこにいてもいいと思えるところです。そこにいると、自分自身が安らぎ落ち着けるところです。自分自身の価値を認めてくれる。そういう場所が、子どもたちの居場所です。

では、子どもたちを育てるのに、どうすればいいのでしょうか。指示したり、命令したりしても決して成長はないのではないのでしょうか。

その後、子どもと面と向かって相手の人格を信じて判断を委ねることが子どもの成長につながるという話を紹介して、講演を締めくくられました。

講演を聞いて、私たちも子どもや若者の潜在的な可能性を信じて、明るいまちづくりに寄与していけたらと思います。

ちよっこしえ話

「横断歩道」

私が最初に体験したのは二年前ですが、今でもときどき目にします。

信号機がない五路幅道路の横断歩道に立って、車が通り過ぎるのをボケッと待っていたとき、その車は白線の手前で止まりました。びっくりして走って渡りましたが、胸がアツくなり思わず頭を下げました。

それから気をつけて観察していますが、中学校近くの通学路ということもあり、人が立っているところと十台のうち二台ぐらいが止まります。

ひと昔前には考えられませんでした。交通マナーが少し良くなったと思います。その度に胸がキューンとしてジワッと嬉しくなります。一日中楽しい気分です。

停車される方の多くは女性で、年齢は四十代～五十代です。

《頭が白くなった年寄りが道を渡ろうとしている。途中で転ぶと危ないから止まってあげよう。》と思われるのでしょうか、本当にありがたいことです。

信号のない横断歩道で人が渡ろうとしているときに停車する車は一割強の低い数値と最新の新聞に掲載されていました。

運転中はどんなに急いでも、横断歩道を渡ろうとしている人がいるときは誰もが止まると、事故が減少し安全に横断できると思います。

(もうすぐ後期高齢者)



〔出雲更生保護サポートセンター移転(予定)のお知らせ〕

移転先 出雲市社会福祉センター三階(今市町本町543番地)

業務開始 平成二十九年一月十日より

※電話等の番号や職員体制に変更はありません。その他詳細はサポートセンターへおたずねください。

電話：〇八五三(二二)七一九〇 FAX：〇八五三(二二)七一九一

出雲地区保護司会だより 第二十八号

平成二十八年十二月一日発行

更生保護功労受彰者

(平成二十八年)

法務大臣表彰

坂本 光弘

全国保護司連盟理事長表彰

川上 清子 川本 龍祥

島根県知事感謝状

森山 正洲

中国地方更生保護委員会委員長表彰

鈴木 二郎 宮本 明子

周藤 千雪 和田 晶隆

周藤 昌夫 長子 明久

小村 恵子

中国地方保護司連盟会長表彰

鐘築 伸正 神田修一郎

藤田 努 岡 賢治

加納 龍雄 延本 輝典

安井 守 横木 俊信

松江保護観察所長表彰

石川 潤子 濱村 芳文

島根県保護司会連合会会長表彰

足立 眞司 花田久美子

山上 太全 川上 雅文

福田 緑

保護司の異動

◎退任

堀江 正俊(出雲)

神田修一郎(出雲)

森山 正洲(平田)

松村 正利(平田)

渡部 卓史(大社)

(平成二十八年十一月三十日付)

◎新任

坂本美喜雄(出雲)

打田美喜子(出雲)

嘉本 武司(出雲)

板木 正久(出雲)

角 美幸(平田)

渡部 享次(平田)

村上 勉(斐川)

(平成二十八年十二月一日付)

編集後記

この時季になると思うことがあります。一年が終わろうとしているのに保護司の役目がどの位果たせたのだろうか、猛省しきりです。八頁ほどの「出雲地区保護司会だより」ですが、多くの皆様に親しみと関心をもつて読んでもらえるだろうかと編集に頭を痛めることがあります。

「ちよっこしえ話」欄は新しいアイデアのもとに設けたもので、誰でも投稿できる気楽な「コラム」です。皆様のご投稿をお願いします。刮目して待ちたいものです。(一ノ瀬 隆男)

出雲地区保護司会

事務所：出雲市小山町五五二番地 電話22-7190